

共同研究「中・近世における生業と技術・呪術信仰」の経過と討議内容

井原今朝男

1 基幹研究

「生業・権力と知の体系に関する歴史的研究」研究代表・井原今朝男
(Aプランチ)

古代における生産と権力とイデオロギ― 研究代表・広瀬和雄
(Bプランチ)

中・近世における生業と技術・呪術信仰 研究代表・井原今朝男

2 実施期間

二〇〇五年度～二〇〇七年度

3 研究代表者

井原今朝男 事務担当者 高橋一樹

4 研究組織 (*所属・役職は基幹研究期間中のもの)

岡田莊司 國學院大学神道文化学部・教授・日本神道史 神道と技
術・呪術

伊藤大輔 名古屋大学文学部・准教授・日本美術史 絵画技術と呪

術

栄原永遠男 大阪市立大学大学院文学研究科・教授・古代貨幣史 貨
幣と呪術信仰

平 雅行 大阪大学大学院文学研究科・教授・日本仏教史 仏教と
技術・呪術

奈倉哲三 跡見学園女子大学文学部・教授・近世思想史 近世知の
技術と思想

野本寛一 近畿大学名誉教授・環境民俗史 環境・技術と呪術

服部英雄 九州大学大学院比較社会文化研究科・教授・日本中世史
地名と民間知

春田直紀 熊本大学教育学部・准教授・日本生業史 生業論

藤井恵介 東京大学大学院工学系研究科・准教授・日本建築史 建
築と呪術信仰

山本隆志 筑波大学大学院人文社会科学部研究科・教授・農業史 農
業と呪術信仰

横田冬彦 京都橋大学文学部・教授・日本近世史 近世知の技術と
呪術

青山宏夫 本館・研究部・教授・歴史地理学 微地形・耕地の知の

体系

◎井原今朝男	本館・研究部・教授・日本中世史 全体総括
宇田川武久	本館・研究部・教授・鉄砲史 鉄砲の技術と呪術
高橋一樹	本館・研究部・准教授・日本中世史 全体総括
永嶋正春	本館・研究部・准教授・漆技術史 漆器技法と知的構造
松尾恒一	本館・研究部・准教授・民俗儀礼 民俗における技術と呪術
中島丈春	本館・研究部・機関研究員
菱沼一憲	本館・研究部・研究補佐員

5 研究目的

前近代社会においては、民衆が飢饉・疫病・戦争や低い生産力の中で生存するために多様な生業活動を展開しており、そこには権力や民衆を含めてその時代の社会が、生存し生き抜くための知的体系をもっていたと考えられる。この前近代的な知的体系は、天文や自然に対する豊かな科学的地理認識、そこから有用財を取り出すための技術的知識、ヒトの肉体や回復力に対する医学的知識などが、呪術、信仰、宗教儀礼などと未分化なままに結合して独特の知識体系を作っていたものと考ええる。前近代社会の中で、生業と技術と呪術・信仰とが未分化なまま存在した知的体系を全体像としてありのままにとらえ直したい。こうした前近代における知の体系をとらえる新概念がないので、とりあえず「知の体系」の造語で代用し、新概念の創造をはかる。生業やこれまでの分業概念などについても、民俗・考古・歴史学における概念の相違点を論議しながら、概念の共有化をはかり、異分野の学際研究における概念と方法論の諸問題についても検討する。

6 共同研究の経過と討議内容と年度ごとの成果と課題

〔初年度 二〇〇五年度の研究計画と研究実績〕

1、研究計画

(1) 「水と生業」というテーマを共通にして、そこで生き抜くための生業の多様性について新潟県塩津潟遺跡のフィールドを中心に研究の到達点を共有にする。

(2) 前近代史研究における「民衆知」の到達点について、現在の研究状況と成果を共有にする。

(3) 歴史学・考古学・民俗学など異分野において生業概念がどのような分業論の批判の中から登場したのか、生業概念がどのような違いと共通性をもっているのか方法論的議論を行い、概念の共通化を図る。

2、研究経過

第一回研究会（合同研究会）

研究テーマ「研究課題の共通化と生業概念について」

二〇〇五年六月四日・五日 於 国立歴史民俗博物館

広瀬和雄 「古代の生産・権力・イデオロギー」

井原今朝男 「基幹研究のテーマ設定と研究分担者の位置づけについての私案」

春田直紀 「歴史学における生業論の登場と変遷―日本中世史・近世史の場合―」

藤尾慎一郎 「考古学における生業」

第二回研究会・現地調査

研究テーマ「潟湖の景観変遷と生業の変化」

二〇〇五年八月七日・八日・九日 於 新潟県新潟市・新発田市・村上市

高橋一樹 「古代・中世の北越後における交通・流通・生業シス

テム―塩津潟（紫雲寺潟）を中心に―」

久留島 浩 「紫雲寺潟干拓をめぐる諸問題」（ゲストスピーカー）

旧紫雲寺潟・旧福島潟・旧岩船潟および周辺地域の景観とおもな遺跡・遺物の調査

第三回研究会

二〇〇六年一月八日・九日 於 国立歴史民俗博物館

研究テーマⅠ「中世の農業技術と地名をめぐる知の集積」

服部英雄 「中近世の博多内海をめぐる民衆知および干潟」

山本隆志 「荘園制下の湿田・湿地と生業」

研究テーマⅡ「近世・幕末期における民衆知の到達点」

奈倉哲三 「幕末維新期江戸市民の政治・社会意識形成―天皇風

刺諸文芸を生み出したものとはなにか。《国民国家草創期における「民衆知」の一環として》

横田冬彦 「近世村落社会における庄屋層の〈知〉の水準―医療

などを中心に―」

3、研究成果と課題

（１） 第一回研究会は、「近代合理主義のマイナス面とプラス面」「生業論と分業論との関係」「生業（せいぎょう）と生業（なりわい）の概念のちがひ」「生業概念の必要性和普遍性」などについて予想外の活発な論議が展開され、大きな検討課題が確認された。

（２） 第二回研究会・新潟フィールド調査（八月七～九日）の総括と課題

【課題設定】

潟湖の形成から堆積・干拓によって景観がどう変化し、潟湖をとりまく生業の変化によって、地域の技術や呪術・信仰などが変化し、民衆知や知の体系はどのように変ったのか、という課題をもって今回の調査を

設定した。

「古代中世の潟湖河川交通論」

高橋一樹報告では、九世紀ごろに形成された潟湖が、日本海を経由しないで潟湖と河川を利用して阿賀北の岩船潟から紫雲寺潟を経て新潟湊に達する内陸水運を古代から中世から近世初頭まで発達させていたこと、潟湖周辺での漁業・狩猟・材木・水田など多様な生業の存在を解明した。

「地域利害の変動と干拓の推進」

久留島浩報告では、近世も宝永・享保年間にかけて内陸水運よりも外海の北前船が有利になるとともに、紫雲寺潟での堆積と悪水による災害問題を解決することが地域社会の要望に変化する。地域の利害調整によって潟湖の干拓が地域の共通目標になって幕府の許可と開発資本の募集によって開発事業が進んだ。その過程では漁業権の喪失などが大きな社会問題とならずに解決され水田化が実現、幕府領に編成されたことなどが報告された。

「新しい問題課題」

「中近世の生業・技術と呪術信仰」という問題を考える場合に、地域の共通利害が社会の変化・時代の要請によって変化し、地域開発が実現されると、生業が激変し民衆の権利や呪術や信仰などが大きく変化しても、地域社会では大きな社会問題になることなく、新秩序を受容していくという論理との関係を含めて考察する必要がある。

（３） 第三回研究会 一月八～九日の総括と課題

【課題設定】

第一は「中世の農業技術と地名をめぐる知の集積」というテーマで、①民衆の知の集積を地名研究からどう探求できるのかという課題について服部英雄報告、②中世民衆が多様な農業生産や生業のなかでどのように生きるための知の集積をしていたのか、という問題課題について山

本隆志報告が行われた。

第二は「近世・幕末期における民衆知の到達点」というテーマで、東の奈倉哲三氏と西の横田冬彦氏の民衆知研究を突き合わせて、その到達点を共同研究に生かすという意図で設定した。具体的には、①前近代の民衆は幕府や藩などの政治権力から自立的にどのような生きるための生業や知の体系をもっていたのかという課題について奈倉哲三報告。②民衆知というような知の体系がどのように獲得されどのような水準にあったのか、という課題について横田冬彦報告が行われた。

「民衆の暗黙知・経験知と文字化」

服部英雄報告では、博多内海の漁場としての瀬や網代・塩屋などに關する民衆の経験知や中国に渡海した船頭が東の風でなく「北東の風」を「片帆」で受けて東に向かうという航海技術を経験知としていたこと。江戸時代一七世紀に入ると、民衆の経験知・暗黙知が文字化されて、知識が権利として主張されるようになったことが報告された。討論では、文字化される経験知と文字化されない経験知との関係や、権利として主張されるとき、浦が主体になるときと、株として個人的所有の集合体として主張されるのか、などが議論となった。

「権力に編成されない生きるための民衆知」

山本隆志報告では、人類学の「半栽培」概念を導入し、湿地や池を開発の対象・前提ではなく、用益の対象として分析するという方法論の提起がなされた。近世前期の史料から、池や湿地を用益して菱・蓮・蓼や鮎・鮒・鯰・わたかななどを販売し、生活の「資」とし、「賦税なし」「取る日は定日あり」という共同体規制があったことの事例が報告された。討論では、国家の支配・統制下に編成されない世界で、民衆が生きていくために用益権を利用し共同体規制を受ける暗黙知・経験知・民衆知の世界や、そうした民衆知の史料は残りにくいという史料論についても議論がなされた。

「幕末期民衆知としての風刺文芸」

奈倉哲三報告では、江戸開城から東北戦争期に江戸を中心に京都・大阪を含む諸都市で、天皇・朝廷風刺文芸が集中的に出された史実を掘り起こし、民衆知が形成された歴史的背景として、町触を町中はもとより借家・店借・裏々まで情報伝達する体制や、「幕府の民づくり」の枠組みを超えて民衆独自の権力批判を行う力、などが報告された。討論では、豪農・豪商など中間層と革命運動との関係、下層民衆を含めた歴史意識を幕府軍と薩長軍のどちらが組織するか、町触の情報伝達組織の実態などが議論になった。

「近世前期の民衆知の水準」

横田冬彦報告では、元禄・享保年間大阪周辺農村の庄屋がもっていた蔵書目録を素材にして、彼らが雑学に近い多方面の知識を集積し、吉宗の医書普及政策に応じて高額医書を購入し、その知識を農村に普及したこと、彼らが漢書や医書で説明できるものを合理的医学思想として身につけ、村人の脱呪術化に一定の役割を果たしたことが報告された。討論では、民衆知の形成に果たした庄屋や村の中の寺院・神官の役割、医療知識における民衆の脱呪術化、近世の合理的医学知識と民間療法との連続性などの論議が進展した。

「新しい課題」

今回の報告・討論では、民衆知を考えたときに文字化される前の暗黙知・経験知とそれが文字化されることの意味、民衆の権利を主張するための文字化、など新しい問題が提起された。近世・近代の民衆知の形成過程における村の庄屋や寺院・神官など中間層の役割、村の共同体性、町触の情報伝達体制などの諸問題が提起された。民衆知の脱呪術化は、漢書によって文字化され説明できるものを合理主義として説明するが、なお呪術性を残すという重層性などが指摘され、新しい視点や方法が提供された。

「中間年度 二〇〇六年度研究計画と研究実績」

1、研究計画

- 第四回 合同研究会 六月三日・四日 歴博
- 第五回 研究会 鹿児島県南さつま市フィールド調査
- 歴博フォーラム 「新しい歴史学と生業概念について」 合同研究会・中間成果報告会
- 第六回 研究会 二〇〇七年一月 歴博

2、研究経過

第四回研究会

二〇〇六年六月四日

ブランチ研究会「寺社の建築技術および開発技術と知の体系」

藤井恵介（東京大学）「建築的な知の枠組みとはなにか」

青山宏夫（歴博）「松尾社周辺の開発と景観」

討論・司会 高橋一樹（歴博）

昨年度は、民衆の知の到達点として江戸・幕末期の「民衆知」を中心に研究をすすめた。「生業と技術」については、地目の多様性や半栽培、ラングーンや湾など低湿地周辺での生業の多様性、航海術や漁場についての経験知・習慣知・暗黙知と文字化の問題として研究が深められた。今年度の課題として、「技術と呪術信仰」のテーマが残された課題となり、まず、技術と呪術のテーマで、藤井（東大）・青山（歴博）・永嶋（歴博）・伊藤（岡山大）の各氏に、宗教と呪術のテーマで岡田（國學院大）・平（大阪大）の各氏に報告をお願いした。

「技術と呪術①」

藤井恵介報告では、中世では寺社が寺大工を通じて建築技術を掌握し、技術のユニットとして相伝しており、詳細な設計図面は一五世紀になって登場することが指摘された。

青山宏夫報告では、松尾社でも河道の変遷にあわせて境内を通る用水路開削を通じて地域開発が進行し用水系が再編成されたことなどが指摘された。

討論では、中世における知の体系や伝達・蓄積が寺社を結節点に行われたこと、建築技術や開発技術が呪術とセットで利用されたことなどが議論された。中世の建築技術や水利開発技術などは、寺社を結節点に伝承や知の蓄積が行われ、建築技術や開発技術が呪術とセットで利用されており、現代技術よりも高度なものと失われた技術とが含まれていることなどが議論された。マックス・ウェバーのいう脱呪術化論の限界性があるにされたのも大きな成果であった。

第五回研究会

二〇〇六年八月二日・三日・四日 鹿児島県南さつま市

「河川低湿地の変遷と貿易・流通拠点の変動」

井原今朝男（歴博）「南薩摩地方フィールド調査研究への問題提起」

柳原敏昭（東北大学）「中世万之瀬川下流域の景観と生業」

栗林文夫（鹿児島県黎明館）「万之瀬川下流域遺跡群について」

宮下貴治（南さつま市歴史交流館金峰）

「万之瀬川下流域の中世陶磁器について——中世前期を中心にして——」

森脇 広（鹿児島大学）

「吹上浜砂丘・万之瀬川低地における完新世後半の地形発達と遺跡立地」

跡立地」

「自然環境と生業」

昨年から共通テーマでは、「自然環境の変化と生業」「生業と技術」の関係については、湾の地形変動と海外貿易との関係を検討するため、鹿児島での現地調査を設定した。

柳原敏昭（東北大学）報告では、中世では万ノ瀬川河口周辺はラングーンではなく、低湿地として開発が進行し、景観と生業が変化していたこ

などが報告された。栗林文夫（県黎明館）報告では、万之瀬川下流域遺跡群は多様な要素が多く、海外貿易や集積地との関係についても断定をさせて今後の慎重な検討が必要だとされた。宮下貴治（歴史交流館金峰）報告では、出土陶磁器から中国・琉球・畿内や東海との交流がみられること、等が指摘された。森脇広（鹿児島大）報告では、吹上浜砂丘が縄文時代には形成され、古代・中世では浅瀬や低湿地になっていたことが想定されるという遺跡立地が指摘された。

現地調査と諸報告によって、縄文時代の自然堤防によって河口付近に低湿地ができて、奈良・平安・中世には生業の多様さと貿易船寄港地・流通交易地として展開したため、阿多隼人や別府として古代や中世の特殊な地域認識が登場してきたこと、などがあきらかにされ、自然環境と生業の多様さが地域性の特殊性と連動していることが指摘され、昨年度の新潟調査との共通点と相違点が明瞭になった。

第六回 研究会

二〇〇七年一月七日・八日 歴博

第一日目 研究テーマ「宗教と呪術」

岡田莊司（國學院大學）「吉田家・吉田神道における呪術と技術の継承」

平 雅行（大阪大学）「中世仏教と呪術―呪術性と合理性」

討論・司会 高橋一樹（歴博）

第二日目 研究テーマ「技術と呪術」

永嶋正春（歴博） 「日本の漆文化9000年―その始まりと変遷」

伊藤大輔（岡山大学） 「美術と呪術―肖像画の場合」

討論・司会 青山宏夫（歴博）

「宗教と呪術」

岡田莊司報告では、神職にとって祭祀作法の伝授が問題で、古代には

壱岐・対馬・伊豆・房総の卜部家が天皇朝廷の亀卜の技術・技能を独占していた。奈良・律令期には陰陽道・天文や崇りの判定・祓い・贖物の供出という呪術の作法が発達した。卜部吉田家が祭祀作法を体系化するのは兼俱の室町時代で、真言・天台の聖教類から神道の中に導入したものが多いという報告であった。

平雅行報告は日本仏教では合理性と呪術性が共存しており、中世の暴力も武力による暴力と宗教による暴力（暴力の呪術性）を合わせて考えなければならない。近世になってから国家の暴力から宗教的暴力が無くなるのではないかという報告であった。

討論では、日本神道の祭祀が日本仏教の教義の影響によって形成されるという報告をめぐって、造船祭・上棟祭など大工や民間祭祀・生業などとの関係で活発な議論になった。近世社会の民衆や私的世界でも、暴力の呪術性は抜け切れていたのか。近代では宗教的暴力が復活するのか、などの諸点が論議になった。

「技術と呪術②」

永嶋正春報告は、縄文の漆技術は多層塗と色の管理の点で「くろめる」技術によって完成するが、弥生の漆では「くろめる」技術＝精製加工技術が喪失され、中国・朝鮮系の新技術が入る。古墳期に土器の漆仕上げがはじまるが古代は漆技術が断絶した時代であった。中世に柿渋と漆の併用がはじまり粗悪だが安価で大量の漆器具の利用が広がるという報告であった。

伊藤大輔報告では、鎌倉期に似絵が発達したのは脱呪術化の観念が発達したためとする赤松俊秀説を批判。平安期には人形を身体代理とする観念や外形描写の相似性よりも生身性のみから肖像画がとらえられていたのではないか。日本で独自に写実性が発達したのではなく、中国から生身性と相似性のある似せ絵を優れたものとする認識が導入されたものであるという報告であった。

討論では、技術の継続性と断絶の問題、技術の進化和退歩、大陸からの反技術革新、似絵をめぐるウエーバーの脱呪術化論、人形と祓えの呪術をめぐる解釈、ゴンブリッチ論の日本適用論、などについて論議になった。

今年度の議論で、①近代化によって現代技術が最高水準にあるとする近代進歩史観に対して批判が出され、寺院建築や漆技術・開発技術をみると、技術の進歩と退歩は相対的なものであること、②近代化とともに脱呪術化するというマックススウェーバー論についても、美術論の肖像画の視点から批判された。あらためて、技術と呪術の併存する関係をどのように相対的に考察していくのが検討課題になった。今後の論議が楽しみである。

3、研究成果と課題

〔全体総括と課題〕

生業論の概念の共有化については、共同研究内外の総力を結集して、準備会を重ね、歴博フォーラムを実施し、一般参加者の意見をまじえて討論することができた。三学共同によって、なお一層民衆生活の細部を解明するための歴史学の方法論と概念を相互に交流しあいながら、創造していくことの重要性が共通認識になったように思う。A B ブランチの共同研究による中間報告としては成功であった。

運営状況については、共同研究員による研究会への参加数が前半はやや減少していたが、後半は活発な研究報告の組織もあって活況を呈した。各研究会の成果や課題については、研究代表者による整理と提言、それらをまとめたニュースレターの発行を継続して全体の共有化がはかれたし、本年度からニュースレターの内容を本館ホームページ上に本共同研究のホームページとして掲載し、随時内容を更新するなど、情報発信に積極的につとめた点が評価されるべきと考える。

A B ブランチの共同研究の中間報告として、歴博フォーラムを実施し、共同研究における方法論や分析概念の共有化を図るという当初の計画を実現することができた。報告集を来年度に刊行できれば、実質的に中間報告を共同研究の実施中に行うことができる。

追記・昨年の国立歴史民俗博物館研究年報二一頁で奈倉報告について、「革命期」と表記したが、報告者は「幕末期」としており、本意を曲解した点にご寛容いただきたい。

〔最終年度 二〇〇七年度の研究計画と研究実績〕

1、研究計画

二〇〇七年六月 第七回研究会 歴博

七月～八月 高知県大忍荘現地調査と第八回研究会

九月～一〇月 三重・愛知県伊勢湾現地調査と第九回研究会

二〇〇八年一月 第一〇回研究会と総括討論

三月以前 中間報告『生業から見る日本史―新しい歴史学の射程―』刊行

2、研究経過

第七回研究会

二〇〇七年六月一日（金）B ブランチ研究会

昨年度研究総括と今年度の活動計画

松尾恒一（本館准教授）

「動物・植物霊をめぐる祭儀と呪法―高知県物部における職能民といざなぎ流―」

菱沼一憲（本館研究補佐員）

「土佐地域調査の問題提起」（二〇〇七・三・二四～二五 事前調査報告）

中島丈晴（本館機関研究員）

「伊勢湾内海に関する地域調査」（二〇〇七・五・二七―二八 事

前調査報告）

〔報告・討論内容〕

松尾恒一報告は、高知の物部川流域での民衆がもっていたいざなぎ流という民間宗教を分析した。この地域は標高四〇〇メートルをこえると水田がなく、焼き畑・伐木・狩猟・鍛冶・大工などの生業をいとなみ、そうした職能民の生業と技術とがむすびついて民間宗教としてのいざなぎ流が民俗的慣行として機能してきたことを指摘する。いざなぎ流の大夫は修行をつめば誰もがなれるという開放性をもち、林業・狩猟・鍛冶・大工など山や樹木に拘わる職能民が、山の神・水神・その眷属である動物霊・植物霊を見分けてその災難を除去するために、多様な御幣と祈祷法を創出したのがいざなぎ流の起源と特徴と説明する。しかも、その祈祷法の中に猟師の鉄砲、樵夫の斧、大工の墨壺・曲尺などの職道具が祭具・呪具として用いられていることをあきらかにした。民間知としての民間宗教が、その地域にねざした生業に拘わる動物霊・植物霊を、生業の職道具を祭具・呪具として用いながら祈祷する方法を創出していたことが指摘された。

本報告は、民衆の知の体系として民間宗教をとらえたとき、地域の信仰・呪術が生業にともなう技術や道具と密接不可分であったこと、生業や技術の変動とともに民間宗教も消滅していくことをあきらかにしたものととして大変興味深いものであった。討論では、歴史学では祭文の資料化が軽視されていること、前近代の民間宗教が近代になって体系化されるのではないか、また時代が古いほど呪術性が高いという通説はまちがいで、病人祈祷なども近代になってからという聞き取りもあることなどが論点となった。いざなぎ流の大夫と一般神職との役割分担・棲み分け、「山・野・原」の空間認識についても「一の山口」が裾野、「二の山口」

が山の神社、「三の山口」が生活圏外の奥山という認識区分があったこと、などが論議となった。

菱沼一憲報告は、物部川流域での「生業と呪術・信仰」と土佐湾内部の前近代社会に存在していた「潟湖交通の復原と権力の場」の関係を、フィールド調査の課題にしたい、というものであった。

中島丈晴報告は、下見調査の報告をしながら、伊勢湾西岸の交流史の研究が進展しているのので、今回は知多半島・渥美半島と伊勢湾西岸との交流をみることによって、伊勢湾を「内海世界」としてとらえることのような歴史事象が発見できるのかを第一の調査課題にしたいという問題提起であった。

第八回研究会 フィールド調査研究会Ⅲ

〔研究テーマ〕

土佐国大忍荘をめぐる潟湖・河川・山岳地帯と生業の多様性と権力の対応

〔研究会経過〕

二〇〇七年七月二八日・二九日・三〇日

第一日目研究テーマ 「香美市旧物部村いざなぎ流のふるさとと生業の山」

服部英雄（九州大学教授）・楠瀬慶太（九州大学大学院）

「土佐国香美郡物部村南池・仙頭の地名と生業」

第二日目研究テーマ 「大湊の潟湖と守護代所・田村遺跡」

吉成承三（高知県立埋蔵文化財センター）

「守護代所田村城館を中心とする香長平野の様相」

市村高男（高知大学教授）

「浦戸湾とその沿岸の世界―国府・一宮・守護所・港湾―」

第三日目研究テーマ 「浦戸湾と吸江庵・五台山竹林寺」

〔現地踏査・報告・討論要旨〕

一日目は香美市農林漁業体験実習館において、山の生活展示を見学するとともに聞取り・近世文書調査をおこない、別府の岡ノ内集落の現地調査をおこない、林業・焼き畑・狩猟・寺社・用水路など山の景観と山稼ぎの実態を見学した。服部英雄・楠瀬慶太報告では、物部村南池集落が戦時中一三軒あったものが現在では二軒のみになっており、廃村直前で、聞き取り調査は今しかできないという緊迫した状況の中での中間報告をうけた。調査で戦国期の検地帳にある地名が聞き取りで採取できたこと。地名が山頂から崖・河・渡川点など至るところに分布し、検地帳にない多くの地名が採取できること、それらが山での生業や戦争中の生活環境と一体化していることが指摘された。討論では、いざなぎ流が現状ではなくなっていること、山での多様な生活が現在では厳しい過疎化の中で廃村の危機に直面していることなどが主題になった。

二日目は、高知平野での水田灌漑の主要幹線水路である山田堰（野中兼山設計）を見学し、その場所が、物部川からの材木筏流しの終着点と対応していたこと、材木の筏流しが農業用水取水口を破壊することから、山の民と農業の民との利害が対立しており、この山田堰から材木を馬や機関車で輸送するようになっていたことを理解した。

物部川河口一帯での現地見学ののち、研究報告会をおこなった。

吉成承三報告では、高知空港建設にともなう発掘調査によって、土佐湾の砂州・砂堆などの背後に多くの大小の潟湖や低湿地帯をつくっており、それが古代中世では浦戸湾の水運と連続していたことが指摘された。

市村高男報告では、物部川河口から潟湖や低湿地帯を利用して浦戸湾の水運を利用した一帯が、古代中世の国府・一宮・守護所・湊津市など政治的経済的社会的な中心的機能をもった地域となっていたことが指摘された。

討論では、現在の地形や自然環境から古代中世の歴史環境を考えることはできないこと、自然環境の変化も歴史時代において発掘調査や自然

科学分析をもちいて復元的研究が必要なことなどについて議論された。

第九回研究会 フィールド調査研究会Ⅳ

〔研究テーマ〕

内海世界としての伊勢湾の自然環境と生業の多様性と地域編成

〔研究会経過〕

二〇〇七年九月八日・九日・十日 常滑市民俗資料館

第一日目

中島丈晴（本館機関研究員）「伊勢湾内海をめぐる問題提起」

中野晴久（常滑市民俗資料館）「中世常滑焼の編年と歴史上の出来事」

第二日目

伊藤裕偉（三重県教育委員会）「伊勢湾内水面をめぐる諸環境」

井原今朝男（本館教授）「伊勢湾における地形変動と生業・流通社会

信用の変遷」

現地調査―伊勢湾横断・安濃津御厨地域踏査

第三日目

伊勢湾の渡海・安濃津・藤潟の地形復原・政所納所遺跡・木造赤坂

遺跡発掘現場見学・曾禰荘現地調査

〔現地踏査・報告・討論要旨〕

一日目の中島丈晴報告では、近年の伊勢湾地域での研究活動が伊勢湾西海岸での三重県内の歴史に限定されているとして、知多半島・渥美半島と伊勢との海上交通を考える必要があるとして、「言継卿記」と奉公衆番帳から、三河・常滑をへて北伊勢長太に渡海している海上交通路の存在を実証した。中野晴久報告では、常滑・渥美焼の分布圏の変動と荘園・山城など地域特性がまとめられた。報告討論では、古記録の地名・奉公人と現地比定の問題、常滑焼の山茶碗・片口鉢・甕・壺などが一三世紀末期に甕に統一される生産・生業民について、議論がなされた。

二日目の伊藤裕偉報告では、雲出川河口にできる潟湖「藤潟」をめぐ

る歴史環境を復原して古代中世の時代的変遷をあきらかにするとともに、一定の地域に政治的中心地ができること、一定エリアに様々な業種の民が存在し複合的機能をもっていることなどを指摘した。井原今朝男報告では、古代中世の中小河川河口付近の砂の海岸地帯では、潟湖や低湿地環境が発達し、それゆえ多様な生業が同時併存していたが、中世後期から江戸初期に砂堆・砂州の堆積と開発事業によって島地化や水田化が勧められ、多様な特産品生産から銭と米によって換算される生業の単一化＝稲作水田化社会に変化していくのではないかと、この仮説が提起された。討論では、南北朝・室町期の史料にみえる「莊船」「小廻船」と「関東渡海之船」「大船」との違いはなにか。伊勢と尾張国知多・三河国渥美との三カ国交通の実態はなにか。北伊勢での海上交通と伊勢と関東・瀬戸内との交通関係などについて議論がかわされた。

午後は実際に伊勢湾を船で知多半島から対岸の津市に渡り、三日目は現地調査を実施した。安濃津御厨・曾禰荘・木造荘などの現地踏査や赤坂遺跡発掘現場見学は、岡野友彦（皇學館大学教授）らの参加をえて討議・情報交換をしながら有意義な研究活動となった。

第十回研究会 最終総括討論研究会

二〇〇八年一月一三日（日）

栄原永遠男（大阪市立大学教授）「提供から見た銭貨の呪力」

栄原永遠男報告は日本における経済外的使用の開始＝呪力を内包する銭貨の初見は天智朝ごろの仏教文化の流入の中でみえ、新鑄銭を初穂として新嘗祭・豊明節会に奉納する儀礼があった。鋳物の出現と献上は国土統治を根拠づけるものではなかったか。という内容であった。

討論では、新鑄銭の少なさと枝銭の問題、大地の実り・経済的な力と王権の呪力との関係、貨幣価値だけで信用が行かない時代と呪力の認識がどう波及していくか、国土・山への支配権と金銀銅など鋳物支配との関係、などについて議論になった。

〔総括討論〕

自然環境と生業、民衆知、技術と呪術、宗教と呪術の四分野にわけて研究成果と課題について討議した。自然環境と生業の分野では、人間の働きかけによって生まれた二次的自然や環境を生業史や環境史や景観史などとして解明していく研究が必要であること、フィールド調査では四箇所とも成果がおおきかったが、古代中世と近世・近代での環境地形の変化が生業体系の構造的変化をあきらかにするところまでいかなかったこと等が指摘された。民衆知の分野では、芸能での知の世界の検討がよかったこと、近世の民衆知がどういう意味で前近代の到達点であったのか内実を具体化できなかったこと。技術・宗教と呪術の分野では、両者の不可分な一体性・相補関係の解明が今後の課題であること、景観の絵画化のなかにも呪術的な表象のされ方もあるので今後の検討課題であること、等が今後の課題として指摘された。

3、研究成果と課題

（1）共同研究の交流と公開

共同研究活動の予定・報告内容の要旨・討論を活発化し、全国の大学・諸機関に分散する研究者間の交流と情報交換のために、ニュースレターを一号から一〇号まで発行した。さらに、研究活動をより広範の人々に公開するため、歴博ホームページの「研究活動」のページでニュースレターを公開し、最新の研究情報の交流に寄与することができた。

（2）自然環境の時代的変遷と生業の多様性

新潟・鹿児島・高知・愛知三重などの現地調査での発掘調査や自然景観復元報告などによって、日本列島の自然環境は、原始古代以来不変で所与のものとしてみることはできず、古代中世では潟湖・河口付近の低湿地環境が広範囲に分布していたことがはっきりとした。とくに平野部

や砂丘地帯・河口付近の自然環境の現代的景観は自然それ自体や人間や社会の干拓事業などの働きかけによって生まれたもので、歴史時代を通じて変化しており、前近代においては潟湖や湖沼や広範な低湿地帯が存在していたことがあきらかになった。列島の海岸線が現代と前近代では大きな差異が存在していたこと、自然と社会との関係の時代的変遷を歴史学の問題として具体的にあきらかにしていく必要性があきらかになった。

第二に、前近代の潟湖や河口付近の低湿地帯では、氾濫や災害の歴史が同居しており、すぐに水田稲作が発達するのではなく、むしろ狩猟・漁労・採集など多様な生業が発達し、陸上交通と海上交通の結節点として湊・津や渡・橋場・市・宿などの交通・流通機能が発達していた歴史環境が存在していたこと、河川の付け替えや堤防・灌漑施設建設など寺院や神社などが開発技術を駆使して自然に働きかける歴史事象などが指摘された。豊かな水辺環境が、土砂の堆積や災害の激化などで地域社会から干拓事業への要請がつよまり、近世・近代になって新田開発となって平野化していく事例も報告され、自然環境の時代的変遷と生業の多様性について解明することが今後の研究課題であることが共通認識になった。

第三は、こうした自然環境の時代的変化と生業の多様性については、フィールドでの考古学と文献史学との交流や民俗学の成果を学ぶことで共通理解をうることであり、学際的研究の成果といえよう。しかし、フィールドに即して近世史・近代史の成果や民俗学の成果とを突き合わせて、コラボレーションの力を引き出すところまでにはいたらなかった。今後の共同研究の課題である。

(3) 無文字世界の知と民衆知

第一に、無文字の世界にいた古代中世の民衆のもっていた知の体系は、

生業での技術・知識を核にしており、地名や耕地や生業についての語彙や慣習知や生活知・民俗知などの相伝などに注目することによって探求できるのではないかという方法的模索が必要であることが提起され、今後の研究課題があきらかになった。

第二に、民衆がもっていた知の体系は、江戸中期から末期にかけて民衆知として成立しており、一部文字化されて蓄積・相伝されるようになっていた。近世の民衆知は前近代の民衆がもっていた知の体系の到達点といえることが共通認識になった。あらためて共同研究において長いスパンで歴史を検討しようとするとき、近世史・近代史とのコラボレーションが重要であることが指摘された。

第三に、建築・工芸・美術・開発技術は、近代技術の進歩とともに脱呪術化するというウエバー以来のシエーマは疑問であり、時代とともに合理的知識の範囲は拡大していくが、絶えず呪術的世界が残っており、各時代ごとに技術と呪術の二面性は存在していることが指摘された。むしろ、その二面性をどのように腑分けするか、また未分離な一体性をどのように解明するかが課題であることが共通認識になった。ただ、フィールド調査に即して、地域社会分析として技術と呪術についての解明や問題提起・討論などを組織することができなかった。今後の課題である。

第四に、仏教や神道、民間信仰は、前近代の日常生活の中では生業や生き抜くための除災招福の技術や宗教的救済力であるとともに、反面では宗教的暴力として機能する社会力を有していたことが指摘され、呪術と宗教との関係も絶えず二面性を分析・解明する必要があると提起された。しかし、この分野でも現地でのフィールドに即して生業・技術・呪術信仰の相互関係を分析・解明して問題提起するところまでいかなかった。

各時代の文献史学・考古学・民俗学・技術史・美術史などの学際的な共同研究では、フィールドに即した研究・分析・問題提起とともに、テーマに即した個別研究の分析・問題提起とを有機的に組み合わせしていく必

要があるといえよう。

8、共同研究成果の公開

(1) 国立歴史民俗博物館編『生業から見る日本史―新しい歴史学の射程』(二〇〇八、吉川弘文館)の刊行

歴博共同研究委員会での指摘により、基幹研究では三年間の中間年に研究内容を公開し、メンバー以外の研究者の意見を吸収しながら、研究成果をあげるようにするよう提案を受けた。そのため、二年間の個別報告と二〇〇六年一月一八日に共同研究メンバー以外の木村茂光(東京学芸大学教授)、甲元眞之(熊本大学教授)と共同研究メンバーの野本寛一(近畿大学名誉教授)、横田冬彦(京都橘大学教授)と井原今朝男(本館教授)による歴博フォーラムを開催して、それを中間報告として刊行した。

目次の内容は次の通りである。

I 新しい歴史学と生業

- 1、生業から民衆生活史をふかめる 井原今朝男
- 2、考古学による生業研究のあゆみ 甲元眞之
- 3、畠作史から見た生業論 木村茂光
- 4、生業民俗研究のゆくえ 野本寛一
- 5、生業論から見た日本近世史 横田冬彦

II これまでの生業論をふりかえる

- 1、先史考古学での生業論の登場と変遷 藤尾慎一郎
- コラム「考古学と生業研究」 西本豊弘
- 同 「過去の生業を明らかにする実験使用痕研究」 馬場伸一郎
- 2、水田と畠の日本史 安藤広道
- コラム「古墳時代の生業論をめぐって」 広瀬和雄

3、生業論の登場と歴史学

コラム「中世の内海世界と生業」

4、生業の民俗学

コラム「古辞書に見る生業」

III 討論 生業論のこれから

フォーラムを終えて

春田直紀
高橋一樹
安室 知
中島文晴
井原今朝男

(2) 歴博研究報告「中・近世における生業と技術・呪術信仰」の刊行
論文集として掲載できたものはつぎのとおりである。

歴博研究報告 題目一覧(五〇音順)

- 伊藤大輔 肖像表現における言葉と物―似絵の位置づけを巡って―
井原今朝男 中世における触穢と精進法をめぐる天皇と民衆知
岡田莊司 吉田兼俱と吉田神道・斎場所
栄原永遠男 提供から見た銭貨の呪力
平 雅行 中世仏教における呪術性と合理性
高橋一樹 中世権門寺社の材木調達にみる技術の社会的配置―中世前期を中心に―
中島文晴 十五世紀中葉における伊勢氏権力構造と被官衆
奈倉哲三 もう一つの戊辰戦争―江戸民衆の政治意識をめぐる抗争その1―
服部英雄・楠瀬慶太 海と民衆知・個人知
春田直紀 中世海村の生業暦
菱沼一憲 内海としての紀伊水道
山本隆志 湿地における荘園・村落と「生業」―平安―江戸前期の葦と菱―

(国立歴史民俗博物館研究部)